

コラム

慈善バザーで看護学校

明治14年から20年までの6,7年間は、高木兼寛にとってきわめて多忙な時期であった。成医会講習所(慈恵医大の前身)の設立、有志共立東京病院(同医大付属病院の前身)の開設、脚気病予防のための海軍兵食の研究、改善など、みなこの時期であった。

これらの事業をほぼ同時にすすめるに当たって、兼寛にはある共通のやり方があった。それは同志と話し合い、ある程度話がまとまったら、さっそく走り出し、あとは走りながら考え、改善していくというやり方であった。そして不思議なことに、走っているうちに、兼寛の行動に感動して援助を申し出る人が必ず現れるのであった。このコラムは有志共立東京病院に看護婦教育所を設立するときの話である。

この病院は、貧しい病人を無料で診療するためのいわゆる慈善病院であったため、常に有志、篤志家からの援助金が必要であった。幸い、鹿鳴館に出入りする華族婦人が、この病院の設立趣意に感動して「婦人慈善会」を結成し、病院の経営を助けてくれることになった(明治17年5月)。

ある日、大山巖伯爵夫人・捨松ら婦人慈善会の有力メンバーは、病院の招きで病室を見学することになった。捨松は、わが国最初の女子留学生として11年間米国に留学し、帰国したばかりであった。しかも最後の2年間はニュー・ヘブン病院の看護婦養成所で学んだばかりであったので、日本の病院の看護婦事情に大変興味があった。ところが彼女が病室を訪ねて驚いたのは、正規の看護婦が一人もないことであった(これは日本にまだ看護学校が一つもなかったの

だから当然であった)。早速、高木兼寛院長に「西欧の病院ではかならず正規の看護婦を採用しているのをご存知のはず、しかもナイチンゲールゆかりのセント・トーマス病院に留学なさった院長がどうして正規の看護婦を養成しようとなさらないのですか」と質問した(たしかに兼寛が留学したセント・トーマス病院は、あの有名なナイチンゲールが創立した看護学校を付属しており、しかも兼寛はそのナイチンゲールの患者中心の医療思想に心酔していたのである)。この捨松の質問に院長はそつと一言「ごもっともなご意見ですが、何分にも経費が足りなくて看護婦の養成まではとても手がまわりません」と答えた。

これを聞いた捨松は、米国で学んだ経験を生かして、ひとつバザーを開いてこの病院のために資金を集めてみようと思い立った。今でこそ、「慈善」とか「バザー」という言葉はさして珍しくなくなったが、その頃の日本にはまだ人のために働いてお金を集めるなんていう考え方はなかった。

明治17年6月12日から三日間、当時西欧化運動の中心であった鹿鳴館を会場にして、捨松らの「鹿鳴館慈善バザー」なるものが開かれた。出品は華族夫人、令嬢たちの手芸品など3,000点で、これを館内13箇所に陳列して、夫人や令嬢たちが販売、サービスを受けもつのである。前代未聞のことで大評判になり、入場者はのべ1万2,000人、入場制限するほどの大盛況になった(この時の光景は、有名な揚州周延筆、錦絵「鹿鳴館貴婦人慈善会図」になっている)。バザーはこのように予想以上に好評だったので、翌年にも11月19日から三日間、再度、鹿鳴館で開催された。このときには、皇太后、皇后両陛下がご出席になり、婦人慈善会ならびに有志共立東京病院の慈善事業に深い関心を示された。

この両度にわたるバザーで得られた収益金は実に1万5,000円に

達し(現在の価額にして1,2億円になる),そっくり病院に寄付された。兼寛院長らは,これをもとにして煉瓦造りのしょうしゃな建物を新築し,看護婦教育所に当てた(開設は明治18年春)。これこそわが国最初の看護学校であり,今日の慈恵看護専門学校の前身である。